

●「雪嶺文学」(石川晃) 41号

全体に雪国の凜とした雰囲気伝わってくるきれいなレイアウトで、読みやすいつくりになっている。エッセイは豊かで充実している。「二十世紀少年と黙示録的終末論」(酒井恵三)や、「篤姫考」(北野豊)など、おもしろいアプローチも見られる。「二十世紀……」に書かれる終末論は、現代的な視点で特に興味深く、今の時代にはこうした終末論はリアリティをもって迫ってくる点に下キリとさせられる。酒井氏が漫画やアニメにすっかり信賴を置き、むしろその柔軟さに注目して思考を広げているのは、粹にとらわれない能動性を感じさせる。終末意識は、核爆弾や環境問題の深刻化による文明の危機感とともに、絶えず我々の中に潜在する意識である。それに目を向けるべく、このエッセイは確かに一つの契機を与えてくれる。また他のエッセイの中に、「朱鷺・トキ(一)」があって、これはこの土地でないと得られない貴重なレポートで、写真までついでの詳細な報告は一読に値する。またトキの生息とエコ田んぼという環境問題との連環も考えて筆を進めている幅広さにも注目したい。

小説は「戦後の苦惱」(東田和子)が印象に残った。文章は生硬だが、戦後まもない金沢駅を中心とした混乱を国鉄を通して描いているその記録性に価値がある。ソ連の抑留から早く帰還した人々が、すぐに共産主義のアジ演説をやり始めたり、国鉄の中に共産主義者が入って、交渉やストを繰り返していく様子がよく描かれ、戦後の共産主義の浸透がどのように行なわれたかなぜアメリカ占領軍がレッドパージをやらなければならなかったか、その辺りの事情が具体的によくわかる。国鉄のような組織が労働運動には最も展開しやすい組織であり、日本全国への運動波及も容易で、ここに下山事件や三鷹事件、松川事件などが起こる背景があることも納得できる。主人公の結婚や父への追懐も絡めて、読んで歴史に立ち会う余得感がある作品である。

●「ばさーじゅ」(大阪府) 21号

《パサーージュ》は通路、旅、移住を意味するフランス語のこと。やわらかい音のなかに、秘めた熱いものが伝わってくる誌である。巻頭作「エゴイスト(一)」(川添和子)は手術不可能な甲状腺癌に罹った主人公の治療を巡っての葛藤をリズム感のある強い筆致で描いたもの。死を見つめながらの迫力のある文章で、ぐいぐいと読み手を引き込んでいく。底流する緊張感はいくつも白熱のまぶしさを孕んでいる。連載になるものと想われるが、普通の闘病ものではない、文学としての展開と刻印が期待できそう。

松岡沙鷗「狂風に消えた金塊」は、読了して、充実感を覚えた。ストーリーの展開力、構成力は抜群で、一気に読ませる筆力はただ者ではない。満州の皇帝溥儀が残した金塊を戦後の日本の復興にあてようと旧日本陸軍の中国にいた中枢部が運び出し、龍機関を作って、日本の政治・経済に関与する。また蒋介石の国軍の編成にもあずかって、極東の軍事にも一役買う。スケールの大きい仕立ては、日本の小説ではなかなかお目にかからない構想である。名前を変えてあるが、瀬島龍三、岸信介など実在の人物との関連も色濃く残されているので、かなりの事実に基づいている素材のよさも作品の大きな魅力となっている。次から次へと起こる事件の連続はスペクタクル映画を観るようなスリルに富んでいて、読み手を物語への陶酔の渦へ巻き込んでいく。不動産や開発への知識もあり、ジャーナリズムや政界の裏にも眼が及ぶ広範な視野は、豊かな人生経験なしでは培えない肥沃な土壌を感じさせる。

戦後の混乱期を生き抜くダイナミックな人々の動きや息づかいもよく伝わってくる。構想の大きさ、筆力、エンターテインメントとしての迫力ある筋運びは一流。隠れた才能を感じた。優秀作である。欲を言えば、クライマックスへのエスカレートとしてやむを得ないのかも引かないが、育てた道代を犯すまではしかたないとしても、墮胎から死へがやや急すぎて必然性が薄くなるのが惜しまれる。上杉の愛人の頼蘭瀧のその後と、

だれが溥儀の乗った飛行機を奉天に向かわせ、ソ連軍に引き渡したかが宙ぶらりんのままである。歴史事実に対する把握力は鋭いが、歴史と人間に対する考察の浅さがエンターテインメントに留めている。最後が時間に迫られ急いだのか、やや形づくりになってしまった。これだけの長編なので、もっと腰を落として、じっくりと寄り切ってほしかった。ろくに当人を知らない第三者が「上杉にしる坂口にしる時代に翻弄された人生だったな」では、あまりに寂しいし、味消しである。人間はほとんどこの言葉に当てはまるので、何も言っていないと同じことになる。むしろそういう人間に光を当て、その存在の意味を付与することが文学の一つの行為であることを考えるとき、結末はもう少しじっくりとした陰影深いものになるべきだろう。この作品はさらに手を入れてぜひ本として出版してほしい。戦争と戦後の見方として、一面を刻んでいる。

●「札幌文学」(北海道) 73号

「羊蹄」(小南武朗)は、老年の孤独を大自然の懐に抱かれる感覚に重ねて、そこへの一体感のうちに人生の終末を見つめる作品だが、ミツバチや川魚などおもしろく描かれているものの、キャンプでの自然観から踏み出していない感じが否めない。羊蹄という山の本質にほんとうに肉薄しているのだろうか、山や自然の真の厳しさや酷さに対峙して書いているのだろうか、という疑問が残る。切れ味の鋭い会話や文は省略の妙があつて、ひきつけられるが、逆にその捨象の中に大事なものが切り捨てられ、置き去りにされている不安がつきまとう。山の姿も「羊蹄」でなければならぬ一つの姿として浮かんで来ず、北海道の雄大な山の何か伝わってこない。山と主人公を中心とする人間たちの間に乖離がある。そこに不満を覚えた。

「サンドバック」(高井かほる)の文章はそれと対照的に手触りをしっかり伝えてくる安定した接触感がある。主人公の明子という女性はよく描かれていて、人物像として鮮やかに動いている。夫にいじめられ抜く

女の一つのあり方はつきり出でて、女性のつらさとひたむきに生きるか細い強さも振動している。自殺した明子が遺していた日記を辿りながらのストーリーの運びは、はじめやや無理かと思いつながら読み進めるうちに、憎む夫の子を産み、その成長に子供への愛と同時に憎しみも重ね覚える記述に触れて、その必然性を感じられ、日記がむしろ生き始めるのを覚えた。むしろこういう部分をもっと増やし、自分の内部にある矛盾を深く抉り出せばさらに深いものになっただろう。人は矛盾の中に生きていく。夫への憎しみと嫌悪と同時に、それだけでは割り切れない何かが存在するだろう。憎む夫の子供を生んで育てるといふことはどういふことなのか、自分の子供でありながら恐怖を覚えるといふことは何なのか、その問い詰めのほうが、自殺へ直結する動機になりはしないだろうか。年金や退職金は老後の生活に大きく、確かに重大ではあるが、自ら生死を決定するものにはなりにくい。アジアの多くの国には、年金などというものは存在しない。むしろそうしたものは人間の本来のものを見えにくくする。それを取り扱った上での自殺の決意を追って摘出してほしかった。それと、言葉や暴力を浴び続けるだけの「サンドバック」というタイトルもよくわかり、インパクトも象徴性もあつていいのだが、あまりたくさんその言葉が使われると味消しになる点、日記のなかで、読み手も納得するだけの「サンドバック」ぶりを特に後半しっかり書き込んでほしかった点が惜しまれた。世の中には離婚したくても離婚できない女性がたくさんいると思う。時代が進んで女性の権利や生き方が強くなつても何かそこに変わらないものがあるような気がする。その心理を説明する意味でもこの小説は大きな可能性を孕んでいる。力作であるし、文章も詩的ないい表現が随所にあつて、力量も魅力も感じる。雄一郎という人間が単色にすぎない点も含めて、自殺への必然性ももう一つ希薄に感じられるところがあまりに惜しい。優秀作と見るか準優秀作とするか迷うところだ。

少し手を入れてみてほしい。

●「山形文学」(山形県) 94号

笹沢信「夕晴れ」は落ち着いた文章の姿が匂いを放っている。文章の流れの底に一種の静謐さが感じられるのは、ただ年輪というだけではない、深い人生体験に根ざした覚悟のようなものがあるからだろう。妻を痛で失った男が五十年ぶりに郷里に帰ってきた。しばらく音信の途絶えていた旧友の那珂西を訪ねるが、杳として行方が知れない。自分の孤独なこれからの重ねながら、旧友の足跡を追ううちに、旧友夫婦は経済的逼迫から団地を出、車のホームレスとなつて、車の中で衰弱死していたことがわかる。「寒さと栄養失調で那珂西は衰弱死した。夫の死を見て妻は外部に助けを求めたこともできた筈だ。が、そうはしなかった。夫の傍で妻は自分の死をひたすら待ち続けた。二人が餓死を選んでまで守ろうとしたのは何だったのだろうか……」と、これから郷里で一人生きる自身の孤独を重ねて、その意味を問うラストは一つの世界を確かに捉えている。しかし惜しむらくは、ほんとうに死を覗いていない、足場の不徹底さが、最後に躊躇いを生じさせた観がある。最後の一文、車の中で自分も寝ようとして、「寝心地は悪くなかった」というシメは、力が入っていない。また「夕晴れ」というタイトルもきれいで何かを象徴しているようで、もう一つはつきり結ばれていない。

●「傷病兵の記録／聞き書き」(牧野房)

昭和十七年に徴兵されてから中国山西省での戦闘に始まり、ニューギニアに転戦、ホーランジュ攻略戦に参加するその戦歴だけでもすごいが、特にホーランジュでの戦闘はすさまじい。何度も負傷してなお闘う姿は、鬼気迫る。こういう体験を共有し、自らの知識として蓄えていくことが、我々の大きな遺産になる。この収集と記録保存を実践している牧野氏に敬意を表したい。

●「海」(三重県) 78号

「海」は時代を反映してのバランスのよさが見える誌。

「三田文学94号／座談会・文芸編集者今昔——文学の未来に向けて」を読む(間瀬昇)など、おもしろく取り上げている。「虚実のあわい／村上春樹「レキシントンの幽霊」(一見幸次)も洒落たコレクション。小説作品群も、何かそういつたセンスを滲ませている。遠藤昭己「ピストルはいかがが?」は、後縦靱帯骨化症という、上半身から進行して背中、腰と、下に向かっ

てだんだん動かなくなる難病を宣告された主人公を軸に動いていく。病気を配慮した上司に転動を告げられ、恋人との別れを覚悟して電車の中で話す。そのとき冗談のように「心中」という言葉が出て、ピストルでいっしょに死ぬジェスチャーをする。タイトルはそこから付けられているのだが、この洒落た会話とシーンとが魅力であると同時に、その軽さで全体を覆ってしまっているところに、この小説の限界がある。本来男女の心理が書ける力量がある作家と見る。絶望的な気持ちで、半ば気晴らしに見てもらった古い師の老婆が、その場所の奥に同じような病の孫を育てていることがわかる。孫の父親に当たる息子は甲斐性なして老婆になじられてばかり。結局もう一度たずねたところ、古い師は孫と無理心中をし、逆に自分はその病が誤診だったことがわかる。運命の転換が交差するのは、鮮やかな手腕だが、無理心中した老婆と孫とをあまりに軽く一つの過ぎ去った風景のように捨てすぎるところに、瀟洒な手際のために問題の重さが犠牲にされている印象が目立つ。これはタイトルにも波及し、このおもしろい「ピストルはいかがが?」という言葉が際立ちすぎ、それが小説全体の真のテーマの重さを覆ってしまっている結果となった。かつこよさや人目をひきつけることのために、肝心なテーマが見えなくなっている。これだけの構成ができる手腕はよくわかるし、美しい恋愛も書けそうな気配がある。よい材料とよい構成に恵まれれば、かなりの成功作が書けそうな気がするが、逆に功を焦りすぎる弱点も感じられる。腰を落として取り組んでほしい。

●「構想」(長野県) 45号

「構想」は地味な雑誌でポリウムも60Pと薄い、それぞれに文学に賭けてきた情熱の確かさを感じられる硬派揃いの誌である。畠山拓「愛の傷痕」が特におもしろかった。緊張感のあるリズムのよい短文は、このテーマや素材にピッタリで、どこか神秘的な狂気を感じさせつつ進んでいく筆運びが、固唾を呑ませる。中国旅行のために愛犬を妹に預けた主人公は、時子という妹の養女にその犬を殺される。時子は宇宙からの呼び声で、奇怪な行動を繰り返す。家出をし、宗教団体の占い師に身を寄せる時子を、主人公は引き取りに行く。そのとき、かつて妹を愛したその記憶が時子の上に蘇り、その古傷に苦渋を覚えるというストーリー。時子が特によく書いていて吸い込まれる。しかし最後、妹との古傷に辿り着いたところで終わっているのは惜しい。妹との愛情と苦悩をしっかりと書き込むべきだろう。それをしっかりと時子と重ね合わせることできたら、この作品は優れたものになっただろう。これからでも加筆してほしい。

他に「詩」のありか(陽羅義光)や、「翁は青年」(倉持れい子)、「じじいのつばき」(鶴田日立男)言いたいことをしっかりと切り切る姿勢は、若々しいすがすがしきがある。「かつて、小泉元首相は自民党をぶつ壊すと大見栄を切った。竹中との二人三脚で郵政民営化を中軸とした金融自由化、グローバルゼイションは何をもたらしたか。医療・年金・教育・介護をはじめ、ニート・パート・非正規雇用・ネット難民・倒産等々社会的格差・経済的格差を持ち込んだ」というふうな言い切りは、朝日新聞の社説を読むより小気味いい。

「新藪の中——沖縄渡嘉敷島集団自決考」(崎村裕)も緻密に論考を展開していて、誠実さを感じられる。

一つ一つの検証は評価できるが、大江健三郎や曾野綾子などの資料論争を検証しているのが中心なので、隔靴搔痒のもしかたがある。直接現地で生存者に聞いたほうが早いだろうにと、気の短い私にはいらいらさ

せられるところもあるが、手堅い実直な論考ではある。

●「私人」(東京都) 66号

カルチャーセンターの発行雑誌で66号を数える継続は立派。「シリウス」(櫻井あき)が素直な文章で自然に読んでいける。大学紛争の時期を思い出しての追憶だが、現代に生きていようなみずみずしさがある。青春時代の恋愛の蘇りが、さわやかな風の匂いを運んでくる。「薦もみじ」(鈴木真知子)は日常生活をよく描きながら、ごくありふれた人がありふれた日常の中に突然死んでしまう意外性を描いて、そこそこの作品になっている。過去の心の罪科の負荷に、死に導かれるように事故死していく日常の底に潜む落とし穴は認知できる。次作を期待したい。今号は全体的に文章が安逸で引き締められていない。「趣味なんです」と自ら告白しているような文章が少なくない。せつかく自腹を切つて発行しているのだから、もつとテンションの高い研ぎ澄まされた文章を目指すべきだろう。

●「創」(愛知県) 3号

名古屋の栄中日文化センター「小説を創る」教室のメンバーが中心となって出している同人誌だが、二〇〇ページを超えるポリウムは立派。二〇人以上が執筆している賑やかさは、中部地方の熱心な同人雑誌活動を反映して見える。

「ワニブシ」(大西真紀)はメロディという名のアメリカ女性の英会話教室が舞台。個性の強いアメリカ人女性との齟齬から、話は太平洋戦争のことに及び、食い違いはさらに大きくなる。ちよつとした言葉に傷ついたメロディは日本を離れることになる。和解はするが、その仲直りと友情の印に、メロディはカツオブシならぬワニ肉の干し物「ワニブシ」をプレゼントする。ワニブシに込められた過去を忘れない苦い思いを反芻するというストーリーだが、戦争に対する振り返りが浅薄で、安全なところから「責任」と言ってみたりするお遊びの「戦争」が感じられて、しつくり降りて来ない。一見おもしろく映るが日本における外国人女性

を描くことは、なかなか難しく、強い個性に対する強い筆致が必要になりそうだ。

「父の足跡」(朝岡明美)は、失踪した父親を捜しながら、父の歩んできた人生を辿るストーリー。学生運動での挫折や、戦争に翻弄されての生家の複雑な事情を聞くうちに、しだいに父の新しい人間像が形作られてくる。ルーツを探る美里自身の姿もそれなりに浮かんで、未来に向かう「あしたががある」という言葉が実質を持つてくるところに、この作品のよさがある。しかし最後まで父親自身は登場せず、間接的な人間造形であるところに、歯がゆさが残る。

●「北陸文学」(石川県) 72号

この誌には、荒っぽい雪の中火事のような奇妙なエネルギーを感じる。「ヤキゲシ」(内村晋)は荒い筆致で田舎のおつきり料理のような文体だが、何が出てくるかわからない怖さのようなものがある。「狂霊」(武田康宏)も一見平凡な絵描きもののように見えるが、狂気を感じさせる不思議な読後感がある。「寒紅」(山村勢一)もそれに通じる世界だが、ルビの多い独特の文体が、逆にその緊張を薄めてしまっている。ルビを多用する必然性は感じられず、逆にテーマを見えにくくしてしまった。雪国の暗闇を想わせる何か、しかしこの誌にはある。

●「穀雨」(東京) 4号

「川を渡ってきた少年」(折口真)は少年時代がまぶしく描かれている。チャンバラや阪神タイガースの帽子をかぶった少年たちの遊ぶ姿が躍動している。「ゼ口番地」という朝鮮人集落に住む少年と遊び友達になり、その友情を深めていくと同時に社会のまなざしに

さらされていく過程をよく追っている。少年はやがて家ごとなくなっていく結末だが、よくある話ではありながら、手堅くまとめている。

●「人情に触れた時代(後編)」(福本安廣) はやはり温かみのあるふつくらとした文章で、人肌のぬくもりを感じさせる回想である。この随想を読んでいると、もう一度過去の懐かしい人々の人情に触れる気がし、同時に今の時代に何が欠けてい、何が様々な事件を生んでいるのか現在の欠落が鮮やかに浮かび上がってくる。「穀雨」は薄い、まだ初々しさの残る雑誌だが、このぬくもりを軸にして成長発展して欲しい。

●「シリウス」(茨城県) 18号

歴史時評「向こう岸に立つ——近衛文麿と石橋湛山——」(備前悠平) は、近衛文麿の「大日本主義」と石橋湛山の「小日本主義」を対比して生き方を併せて追っている、わかりやすい歴史論評である。近衛の考え方、生き方もよくわかり、石橋の論も、それを貫いた意志の強固さも、鮮明に伝わってくる。日本がすべて満州に傾き、中国へ進出して戦時色が強まっていくなかで、よくその主張を翻すことなく信念を貫いた石橋の姿勢は、見習うべきものを示している。戦争以前にも「日本は四島だけでやっていけるし、そうすべきだ」という見方をすではつきり示している先見性にも驚かされる。こういう優れた人物が以前は多くいた気がするが、翻って現代を見るとその層の薄さに肌寒くなることも覚えさせられる。「歴史時評」である。

●「飛行船」(徳島県) 5号

今号の「飛行船」は充実している。もしこの同人雑誌評に雑誌賞・団体賞があれば今回の賞は「飛行船」になるだろう。いい作品がいっぱいである。「花の在りか」(竹内菊世) は昔の奉公に行く少女を生き生きした筆致で描いていて、時の隔たりを感じさせない自然さを感じさせる。色褪せない清新さが現代のなかで輝いて見えるのは手腕といふべきだろう。鮎合巧「奇妙な葬式」もシーンと会話とが生きている。マテオ・

ファルコーネの挿話も生きている。心不全で急死した叔父の葬式で、愛人らしい女性とその死体に取りすがって泣くシーンと対比的に、死後すぐに他の男と再婚する妻のエゴイステックな醜さもよく浮かび上がる。この人間に対する疑いの手綱を緩めない態度は、しっかりと書き手の足場を感じさせる。

「夏のおそぎ」(松田一美) は、現代の大学生の日常を、昭和十八年戦争中の時代にタイムスリップさせながら、戦争に向かう主体的な意識としてその落差を再体験させようとする野心的な構成がいい。大学の講義の最後に突然教授から呼ばれ、今から予科練に行くことを命令される部分は、意外性がむしろ生きている。当時の召集はそういうものだったろうし、ありふれた日常の中に突然襲いかかって破壊してくるものが戦争というものだろう。現代との重ね合わせが生きている。

「瘡蓋」(藤原葵) は、突然会いたいと連絡してきた夫の愛人との対決が中心だが、相手の「主婦というぬるま湯のなかで、安心しきっている女を見るとむかむかしてくる」という動機が説得力がある。最後の一文もよく、たんに浮気ものでは収まらない筆者の鋭い視点が感じられる。

「消罪の寺」(斉藤澄子) はさらに洞察深く一人の薄幸の女性を描いている。二つの殺人事件を軸に、その女性の過去を抽出し、運命の影の下で生きる女性の姿を浮き彫りにしている。たんなる殺人事件ではなく、むしろ運命悲劇として緩まず絞り込んでいく筆致に、造形の深まりが感じられる。四国八十八ヶ所霊所めぐりの設定も生きている。前の三作は準優秀作のレベルにあり、またこの「消罪の寺」は優秀作に推されてもおかしくないだろう。

評論の「吉本隆明に学ぶ2」(大北恭宏) もよく吉本隆明と現代の問題をつなげてエスプリの軽快な翼を展開している。これだけのレベルの作品を集めるのは、主宰者の情熱や見識、また牽引力が伴わないとできないことである。

る。「飛行船文学賞」を主催するなど、その挑戦をも含めて、竹内菊世氏のエネルギーに敬意を表したい。

●今回は、優秀作は「狂風に消えた金塊」(松岡沙鷗)、「ばさーじゅ」(21号)、「消罪の寺」(斉藤澄子)、「飛行船」(5号)の二作。それに近いものとして「サンドバック」(高井かほる)、「札幌文学」(73号)を挙げたい。準優秀作は「羊蹄」(小南武朗)、「札幌文学」(73号)、「夕晴れ」(笹沢信)、「山形文学」(94号)、「ピストルはいかが?」(遠藤昭己)、「海」(78号)、「愛の傷痕」(畠山拓)、「構想」(45号)、「父の足跡」(朝岡明美)、「創」(3号)、「花の在りか」(竹内菊世)、「飛行船」(5号)、「夏のおそぎ」(松田一美)、「飛行船」(5号)、「瘡蓋」(藤原葵)、「飛行船」(5号)。

ノンフィクション・評論部門では「新数の中——沖繩渡嘉敷島集団自決考」(崎村裕)、「構想」(45号)、「歴史時評」向こう岸に立つ——近衛文麿と石橋湛山——(備前悠平)、「シリウス」18号、「傷病兵の記録」聞き書き(牧野房)、「山形文学」(94号)、「吉本隆明に学ぶ2」(大北恭宏)、「飛行船」(5号)を準優秀作としたい。●寄せられてくる作品も少なくなり、残念だが後回しにさせていただいた誌も少なくない。目の及ばなかった他の同人誌のなかにも、よい作品がたくさんあるだろう。同人雑誌という脈には、まだまだ多くのすばらしい宝石が眠っていることを信じている。すべてに目を通せないことに対し、申し訳ない思いでいっばいである。だれかもう一人か二人これを担っていただける方を募集したい。また本号でもこの欄を設ける必要を痛感している。どうか体勢を整えるまでしばらくお待ちいただきたい。

またいよいよ第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の公開選考会が九月五日午後一時より山梨文学館で行なわれる。ぜひ参加していただき、同人誌作家自らの手で価値ある作品を論評し、議論し、選んで、日本文学に新しい流れを作っていたきたい。

(作家集団「塊」/五十嵐勉)